様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年３月３１日現在

機関番号：３３１０９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８年度　～２０１０年度
課題番号：２０５３０６４４
研究課題名（和文）子育て支援にかかわる保育士への臨床心理学的研究

研究課題名（英文）　Clinical psychological research on children’s nurses related to support children’s growth

研究代表者　橘　玲子（TACHIBANA REIKO）
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・教授
研究者番号　００００１８３８４

研究成果の概要（和文）：Ｓ市との連携により、保育士の子育て支援力のアップを目指す実践活動と調査研究を行った。主なものは次の３点である。①保育士を対象にして絵本に関する情報提供と子どもの理解について講義を行った。絵本は保育活動としてあまり評価されていなかった。②いくつかの保育所・園で２回の巡回相談を行ったが、保育現場でのコンサルテーションは非常に有効であった。③保育士のメンタルヘルスに関する調査の結果、保育士のストレスの高さがうかがわれた。

研究成果の概要（英文）：We worked with S city and conducted action research on children’s nurses, in order to develop their care skills. The research has three main points. First, although we provided the children’s nurses with information about picture books and gave lecture on how to understand children, they did not appreciate picture-book reading as nursery activity. Second, we held consultation among a few nursery schools two times and the consultation was very valid way of improving these nursery environments. Third, we investigated mental health of children’s nurses and found that they were very distressed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：子育て支援、保育士、絵本，コンサルテーション、巡回相談、メンタルヘルス、地域援助、臨床心理士

１．研究開始当初の背景

国の施策により平成６年からエンゼルプランなどの５カ年計画が進み、平成１７年には次世代支援対策により市町村の子育

て支援対策が進められることになった。今回私どもがかかわったＳ市においても平成１９年秋に、「次世代育成支援行動計画」を具体的にすすめなければならなく、子育て支援策の具体的内容の検討が本学大学院との間で始まっていた。子育て支援対策事業は広範囲にわたっているので、この中で、臨床心理士が行う支援策を子育て支援活動に大きな役割を果たす保育士にターゲットをおくことで、行政との意見の共有が得られた。絵本の講義と子どもの理解、保育士の置かれている状況に関する意識調査などが翌年に向けて実施された。この予備的調査がベースになって科学研究費を申請することとなった。

２．研究の目的

保育士が子育て支援にはたす役割が急速に多様化し、保育士の専門性が平成１３年に社会福祉法の改正によって法制化されることとなった。当然ながらそこには子育て支援に関わる社会的責任や保育力のアップが期待されているが、実際にはどこまで保育士へのサポートがあるかについては検討が必要であると考えられた。そこで子育て支援とそれに関わる保育士について支援や調査研究を行うことにした。その内容は以下の３点にまとめることが出きる。

(1)　保育士の実態調査がまだあまりなされていないことから、保育士のメンタルヘルスに関する現状調査を行う。
(2)　保育活動の中で絵本による子育て支援活動の検討をする。
(3)　子育て支援に対応すべく保育力のスキルアップをねらって保育現場でのコンサルテーションを行う。

３．研究の方法

(1) 保育士のメンタルヘルスに関する調査は他の職種との比較をするため標準化された質問紙法で行った。

①保育士へのバーンアウト状況、ストレスコーピング、バーンアウトスコアについて質問紙調査。（女性保育従事、７００名を対象に稲岡訳 BM 尺度、宮岡による昭和大式対処行動様式尺度）。

②子育て支援における臨床心理士の役割（462 名を対象に質問紙調査）

(2) 絵本について年に４回講義を行う。時に参加者の参加型講義もある。毎回６０から３０名の受講者。

多様な絵本の紹介と楽しみ方、活かし方について講義。満足度に関する質問調査を実施。これまで４年間に行った絵本の講座から取り上げた絵本の本のリストを集めた小冊子の作成。

(3)　Ｓ市内の保育所に臨床心理士（本学共同研究者）の巡回相談。保育現場でのコンサルテーション。同じ保育所に原則的に２回訪問し子どもの変化など確認。保育現場で行うコンサルテーションの効果。

４．研究成果

(1)保育士の置かれている状況

保育所・園には、女性の社会進出により多様なニーズが求められるようになった。保育所はかっては養護家庭の保護者に代わって子どもを預かるというような機能から、働く女性の支援へと大きく変わり、子育ての一環を担うことになってきた。それは女性の社会進出により、子育てに時間が割けなくなり、１人の女性の出産率の低下が余儀なくされたことも大きな原因の一つである。また仕事をしない場合でも平均出産人数が１ないし２人位なので、遊び仲間がいないことで保育所・園に入ってくる場合も多い。

人口分布の偏りは日本の経済や社会に大きな影響を与え、今ではジャパンシンドロームと世界から注目を集めることになった。女性の就業だけではなく、女性が子どもを産まない現象も子どもにとっては発達上に影響が出ることも考えられる。保護者から離れて子育ての場が保育所に大きく求められてきているのが現状である。

保育所は多様なニーズに合わせ夜間保育とか年少者の預かり保育、さらには保護者の育児力の低下による問題などが一気に保育士への期待となって現在に至っている。この流れの中で、保育士の力量が求められることになる。一気に専門化し、保育活動内容が変化したにもかかわらず、保育士への教育やサポートが行われているかどうかは大変疑問である。

一方、臨床心理士も子どもの発達上の問題や発達障害など、次第に子育て支援の重要性に関心が向くこととなった。さらに子育て支援に保護者へのサポートはいうまでもないことであるが、保育士の存在の重要性にも関心がもたれるようになった。そこで保育士の現状をもっと知らないと、保育士との協働作業がうまく機能しないことが予想された。実際に調べてみると保育士の調査は非常に少ないことが判明した。

発表論文の④では、４７８名の女性保育従事者のバーンアウトに関する質問紙による結果から、稲岡の基準に添って整理すると、健全群は 47%, 警戒群は 30, 5%, バーンアウト群は 16, 1%, 病理群は 6, 3%であった。なお、

年齢による比較では、２０代、３０代の若手保育者の方が４０代、５０代の高年齢者に比べると優位にバーンアウト得点の高いことが判明した。また、園長とクラス担任の比較ではクラス担任にバーンアウトスコアが高く、経験年数１０年未満においても１０年以上のものよりバーンアウトスコアはハイスコアを示した。

健全群とバーンアウト群では、ストレスコーピングに違いが見られ、健全群では困難な問題に挑戦するという問題中心のコーピングとか気晴らしなどが使われるのに対して、バーンアウト傾向群ではやつあたりというようなネガティヴな情動中心のコーピングが用いられていた。これまでの研究では保育士の多様化する業務との関連や対人関係などが指摘されているが、院生の修士論文から保育士の実態を見てみると、仕事上での困難さを感じているものが多く見られた。ただ保育士の専門性への意識も高く、心理学的な発達に関する知識を得たいという要望があり、研修内容にこれらが生かしていけるように工夫しなければならないことがわかる。さらに職場の対人関係や保護者対応についての苦労、抱え込んでしまう傾向などが保育所・園への巡回相談でも読みとることができた。

(2)保育活動に生かす絵本

ずいぶん以前から、絵本の読み聴かせがボランティアによって行われており、その意義も高く評価されている。また、幼児教育にとって絵本の重要性はいうまでもないことであるし、保育所や幼稚園でも日常の保育活動として読み聴かせが行われている。しかし改めて、絵本が子どもの心理的成長にどのような意味を持つのか、あるいはどんな絵本が出版されているかという絵本の情報について、保育士は意外と関心がないことが判明した。特に子どもの心理的発達や、絵本に関する臨床心理学的立場からの情報提供をもっと積極的に行う必要があるのではないかというのが本研究の出発点であった。

S 市との子育て支援事業に関する連携で、保育士の子育て支援スキルの向上を検討したことの一つに、絵本の重要性を再認識し、絵本が子どもの成長に寄与するものであり、読み聴かせを保育者が意義あるものとして自覚することなどを目指すことになった。

絵本による子どもの理解は柔軟で、しかも保育士自身にとっても、心理的に活性化されると思われる。最近の絵本ブームには絵本の持つ「癒し」について論ずるものが多くなっていることからも頷けることである。

ともあれ絵本と保育士との関係を調査（文献⑤）することから始まった。

① 絵本の選択
参加者約６０名に好きな絵本を推薦してもらった。３名以上の推薦者による１４冊には、良く知られている絵本の他に、絵本のシリーズものが６種類入っており、３名以下を見るともっとシリーズものが増えている。シリーズものが必ずしも悪いとは言えないが、数千種類ある絵本からシリーズを選ぶのは少し幅が狭いと考えられる。

② 絵本を保育所で読む時間
１週間に３０－６０分読み聞かせをする方は４２名中１８名で、後は３０分以内が１０名であった。無回答者が多いというのは理由がわからないが読み聞かせをしない保育士も多いかもしれないと推測された。

③ 絵本の選択
複数回答での記入から保育所・園にあるものと自分の趣味で選んだものが圧倒的に多かった。

④ 絵本の意味
多くの保育士は絵本が子どもの取って大切であるし、子どもの理解にも有益であると受けとめていた。しかし自分のためにも心豊かになれるという感じ方はすごく少なかった。

この絵本講座はＳ市の各保育所･幼稚園に子育て支援事業の一環として２－３名の参加者を募って開かれた。今述べた特徴は始めて開かれた２００７年の調査で、この資料を基に３年間毎年企画を変えながら講座を開いた。

取り上げられた絵本は出きるだけ広い範囲のもので、子どもの理解を目指したものや子どもとは限らない生きる姿に関連したもの、保育士の気持ちに感動が与えられるものなど様々な角度から絵本が紹介された。

このリストは小冊子として「臨床心理学から絵本おすすめリスト」となり、参加した講師から一言コメントが加えられて保育所・園に配布された。

保育士の参加者は毎年４回、３年間にわたって行われたので、５００名くらいに達している。多くの参加者は絵本の多様性と何よりも読みたいという気持ちになったこと、さらに子どもに読んであげたいと思ったことなどが調査ではっきりした。保育士同士も絵本の紹介をして楽しんだ体験もあり、保育士へのサポートになったようである。絵本の意味についてはまとまって講義をしたわけではないが、例えば昔話の再認識とか、絵についての認識とか、絵本とユーモア、絵本によって開かれる情緒的な世界などに関心が向けられたことは大きな効果であったと言える。

特に、S 市では子育て支援拠点センターと

児童書を中心とした図書館が併設されているので、利用しようと思えば大変便利な施設を持っていることになる。

なお、修士論文でこの施設を使って保護者への読み聞かせをまとめた院生がいて、ここでも保護者が絵本を読み聞かせたいと思っても何を読んだらよいかとか、あるいはそんな時間的余裕がないなどという傾向が見られた。

子どもの数が減り、子ども同士の関係も希薄になりがちな時代にあって、絵本が提供する体験は子どもに静かな内省的な時間を提供し、そこで情緒的な世界に触れることができ、しかも読み聞かせの体験は保護者と子どもの相互に幸せな時間を提供するチャンスとも言える。それは保育士にとっても、活動的で活発な子どもの遊びや行事とは異質な時間を提供するものとなるであろう。子どもにとっては筋肉運動的な活動と他者と共同して活動的に遊ぶ体験と、静かでイメージを通しての情感に触れること、いずれも必要な世界である。保育士もこのようなことは意識しようと思えば出きるが、日地上の保育活動ではどうも影になってしまうようである。

これまでの調査によると絵本講座は保育士に子どもの成長と関連して高い評価がされた。

（3）保育士へのコンサルテーション

平成２０年秋から平成２３年２月まで発達障がい児のための巡回相談が３年間行われた。巡回相談を担当した者は共同研究者で臨床心理士であり、後では院生も同伴して保育士のコンサルテーションと院生の子育て支援に関する教育を目指すことになった。

保育所・園への巡回相談施設（２回巡回箇所）件数は、平成２０年度には１５箇所（９）、平成２１年度には１３箇所（４），平成２２年度には８箇所（７）であった。

巡回相談以外にも「児童、保護者への関わりについて」「対応に困る児童への支援について」「子どもが必要とする支援を目指して」「子どもの困り感をとらえる」など何回かにわたって講義をしているが、これらの講師は巡回相談者なので、コンサルテーションが比較的スムーズにいき、最終年度には保育士と臨床心理士である教員との事例検討会が開催されるまでに至った。

保育所・園への臨床心理士の巡回相談はこれまでに新潟県内では行われていない。実際に保育現場でコンサルテーションを行うと保育士と臨床心理士双方において、有意義であることがはっきりしてきた。保育士からの抵抗が始めの頃には若干見られたので、行政も希望する施設から始めるなど配慮して開始した。年を追うごとに保育士から高く評価され、そこでの保育士のおかれている問題も少しずつ明らかになってきた。ストレスの調査で、バーンアウトするバックには１人で抱え込んでしまうとか相談ができないなどがあったが、保育所・園でのコンサルテーションは保育現場で子どもの問題を共有できることで抱えなくて施設で子どもを見ることも可能になってきた。

巡回相談を行うスタッフはそれぞれの保育所・園の事情を検討しあっているので、施設の特徴も把握できるようになった。

今後の問題として、事例検討など保育士のワークショップを積極的に行うこと、巡回相談は全施設に行けないので、不公平感が出ることをどうするか、また子育て支援業務として１歳半健診や３歳児健診の情報を有機的に利用できないかなど考えて行くことになった。

最後に、保育カウンセリングという言葉を使わなかった理由は、われわれの子育て支援対応にはコンサルテーションを中心に行っているので、保護者対応が入っていないことと関連がある。いずれの名称でもよいが保育士へのサポートシステムを今後構築する必要がある。多様なニーズがある中で、保育士の役割や活動範囲が一層専門的な視点を求められてくることが予想される。

（4）　まとめ

①　Ｓ市という地方都市大学院とが事業提携を結んで少なくとも４年間子育て支援事業をすすめることができ、大きな成果を挙げることができた。行政と専門家がチームを組むことはそう簡単なことではない。行政と連携を行う際に知らなければならないことは法的根拠がないと事業がやれないというということであった。どういう法律に則って行う業務か臨床心理士も知っておかなければならないと実感した。。常識的ではあるが、専門家にはなかなか理解しにくいところではあった。

②　保育士のバーンアウト予備軍は予想していたより高い割合を示していた。その理由として急激に専門的業務が科せられてきたこと、保育活動の多様さ、責任の過重、保護者への指導、虐待の発見とその業務の多様性が関係するであろう。しかも保育士をサポートするシステムやマンパワーがなかったことが挙げられる。

③　子どもの成長にとっての絵本の活用や絵本の情報の少なさなどに現れているように、思ったより保育活動に占める位置が低いことがわかった。この講座の４年目になると多くの受講者により、絵本に関する動機付けが出て、しかも図書館

を十分に活用できることで絵本の情報が生かされることとなった。絵本の再認識が進んだと思われた。

④ 大きかったのは何といっても保育所・園の巡回相談であった。まだこれは論文にまとめてないので、これからであるが、コンサルテーションを受けた保育士は大きな満足感があり、その内容は自分一人で抱え込まないでよいこと、さらにどう関わって良いか混乱しているときに方向がコンサルテーションによってはっきりすることであった。勿論そう簡単に解決はしない。しかし方向が少し見えてくると次回の巡回相談まで、しっかりと見て関わるということがはっきりしてきた。少しではあっても一歩前進であろう。これが保育士の事例検討会にまで発展したことは大変嬉しいことであった。

⑤ 子育て支援は幅の広い分野でいろいろな職種が関わっている領域である。保育士に自信と子どもへの関心を持ってもらえることが大切である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 ５件）

① 橘　玲子　行政と連携した子育て支援活動―　院生の教育・研修について―　子育て支援と心理臨床、査読無、Vol.3, No.１ ,2011,pp.42-48　（来月発刊予定）

② 久住とも子、蝶名林稔、橘　玲子、運上司子、滝口俊子、新潟県三条市の子育て支援の取り組み、子育て支援と心理臨床、査読無、Vol.2,2010,pp.68-75

③ 橘　玲子、運上司子、伊藤真理子、浅田剛正、村松公美子、齋藤恵美、真壁あさみ、子育て支援にはたす臨床心理士の役割、新潟青陵大学大学院臨床心理学研究、３号、査読無、2009,pp.15-22

④ 齋藤恵美、田中紀衣、村松公美子、橘　玲子、保育従事者のバーンアウトとストレスコーピング、新潟青陵大学大学院臨床心理学研究、３号、査読無、2009,pp.23-3

⑤ 橘　玲子、運上　司子、伊藤真理子、真壁あさみ、S 市における子育て支援に関する保育士への臨床心理学的援助、新潟青陵大学大学院臨床心理学研究、２号、査読無、2008,pp.81-85

⑥ 橘　玲子, 運上　司子、間　藤侑、真壁あさみ　臨床心理学から絵本おすすめリスト　小冊子 2011,pp.1-23(科研費による出版)

〔学会発表〕（計１件）

① 橘　玲子、子育て支援の教育・研修を巡って　日本心理臨床学会第２９回大会シンポジュウム、シンポジスト,2011,9,3, 東北大学・国際センター大ホール（仙台市）

〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）
〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
橘　玲子（TACHIBANA REIKO）
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・教授
研究者番号：00018384

(2)研究分担者
運上　司子（UNJYOU SISAKO）
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・教授
研究者番号：00440462

村松公美子（MURAMATUKOMIKO）
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・教授
研究者番号：60339950

伊藤真理子(ITO MARIKO)
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・准教授
研究者番号：50440467

真壁あさみ（MAKABE　ASAMI）
新潟青陵大学・看護福祉心理学部・准教授
研究者番号：20290067

佐藤忠司(SATO　TYUJI)
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・教授
研究者番号：90440461

齋藤恵美(SAITO　MEGUNMI)
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・助手
研究者番号：50460324

間藤　侑　(MATO　SUSUNMU)
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・非常勤講師
（新潟大学名誉教授）
研究者番号：40018924

浅田剛正(ASADA　TAKAMASA)
新潟青陵大学・大学院臨床心理学研究科・助教
研究者番号：10521544

(3)連携研究者
該当者なし